レッグ編 *Lexilogus* に記される粵語音の表記と体系

吉　川　雅　之

目次

1．緒言
2．ラテン文字表記
3．粵語音の体系
4．結語

1．緒言

19 世紀最大のシノロジストの一人であるジェームズ・レッグ（James Legge）は，英華書院（Anglo-Chinese College）の移設に伴い香港へ移る 1843 年までの 4 年間を，マラッカで過ごしている。彼の処女作と称してよいであろう対訳文例集 *A Lexilogus of the English, Malay, and Chinese Languages: Comprehending the Vernacular Idioms of the Last in the Hok-keen and Canton Dialects*（以下，*Lexilogus* と略称）は，刊行物としてはその英華書院院長在任期唯一の著作であるにも拘わらず，従来歴史学をはじめ学術研究の考察対象となったことが無い。僅かに高田（2000：747）の「[Legge 1841] の表記は [Bridgman 1839] に據っている」という，論及と呼ぶには些か短い一文が，*Lexilogus* の言語・文字に関して提出された目下唯一の学術的知見である。レッグに関する研究の盛んなことからすれば驚くべき現状と言わざるをえないが，本書が匿名で刊行

されたことがその一因を成しているのかも知れない。レッグの編とするのは，管見によれば1851年の序文を冠する『中華叢報総合目録』（*General Index of Subjects Contained in the Twenty Volumes of the Chinese Repository*）の113頁が最初であり[(1)]，Wylie（1867：121）がそれに次ぐ。なお惜しむらくは，高田氏のこの一文は，本書の序文の一句「本書で粤語音を表すために用いられているラテン文字表記はブリッジマン（Elijah Coleman Bridgman）の『名文選集』（*A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*）で採用された方式に従っている」[(2)]をそのまま引用したものに過ぎないと推察される。本書の言語・文字を調査した結果得られた知見ではあるまい。何故ならば，小論で明らかにするとおり，本書の表記法は序文のこの文句に違い，『名文選集』の表記法と全てにおいて合致するものではないからである。

このように言語・文字に関して先行研究と称すべきものが存在しない*Lexilogus*であるが，マラッカの英華書院で行われていたプロテスタント・ミッションによる翻訳と教育の実態を知る上で不可欠な史料であるのみならず，記された表音文字からは当時の閩南語と粤語の特徴をかなり体系的に把握することが可能となるため，言語資料として他を以て代え難き価値を有する[(3)]。そこで小論では本書で用いられた粤語音の表記法（即ちラテン文字による表音）を分析し，記された音韻体系を共時的視点に立って俯瞰する[(4)]。*Lexilogus*という文献およびその印刷についての考察，閩南語音や粤語音の提供者（即ち話者）と基礎方言の究明，そして中古音との対応関係に基づく通時的諸相や同時代の文献に記される言語音との比較研究は，機会を改めて行う[(5)]。ただし，本書の序文には「幾つかの語では頭子音に違いが有るかも知れない。と言うのは，口述をした華人は広州市街地の出身ではなく，約50里離れた村落の出身だからである」と記されており[(6)]，粤語の基礎方言は広州市街地のものではない。

*Lexilogus*は1841年に，当時マラッカに在った英華書院の印刷所で印刷された，英語とマレー語・中文・閩南語・粤語の対訳文例集である。判型は縦

30cm，横 22cm で，ノンブルは 110 で終わっているが，第 105 頁と第 106 頁の間には天に 102，107，104，105 と印刷された計 4 頁が存在するため，合計 114 頁である。全文例とも中文は漢字のみで表記されているのに対し，閩南語と粵語はラテン文字のみで表記されている(7)。閩南語のラテン文字には補助記号による声調の表示が有るが，粵語のラテン文字にはそれが無い。

粵語音をラテン文字で書き取ったのはブラウン（Samuel Robbins Brown）であることが序文に記されている。彼こそは 1839 年にモリソン記念学校（Morrison School）の校長となり，後にヘボン（James Curtis Hepburn）等と共に幕末維新期の日本で新約聖書の翻訳に尽力したことでその名を広く知られている人物である。後にブラウンは *Lexilogus* の文例を日本語に訳して『日英会話篇』（1863 年刊行）を著したことが『S.R. ブラウン書簡集』（48）に記されている。*Lexilogus* はその刊行から 22 年後には，日本における英語学の系譜に連なる一書となるのである。

筆者が国立国会図書館所蔵本について行った統計では，本書で使用されている漢字は延べ 7216 字であり，粵語音を表すラテン文字表記は延べ 1205 文，7862 音節に達する。この音節数は，粵語に関する 19 世紀最初の欧文資料であるマーシュマン（Joshua Marshman）の著作 2 点に記された粵語音の音節数の和に匹敵する（吉川 2009）。なお本書はマレー語と粵語，閩南語と粵語を対照した史上初の教材でもある。

2．ラテン文字表記

2.1　凡例について

Lexilogus に記された粵語音の体系を提示するためには，先ず用いられたラテン文字について各字母の表す音価を推定せねばならない。本書で粵語音を表すために用いられたラテン文字表記は，一見 Bridgman（1839）で最初に採用

された方式に従っているかの如くである。この方式は Bridgman（1841）や Williams（1842）といった同時期の粵語に関する書籍で用いられ，当時粵語音表記の主流の座に在った。雑誌『中華叢報』（*Chinese Repository*）にはこの表記法の草案が掲載されている（第 5 巻：22-30，第 6 巻：479-486）。

Lexilogus には序文に続く二丁に「粵語のラテン文字表記についての凡例」が印刷されている。Bridgman（1839）や Bridgman（1841），Williams（1842）にも凡例が設けられているが，その構成と文句はいずれも *Lexilogus* の凡例と基本的に同じである。つまり字母の記号表現と記号内容の対応は，基本的に *Lexilogus* のものと同一だということである。凡例の大多数の項では “á pronounced as in *calm*, *balm*, *farther*.” のように英語の語彙を挙げて説明がなされている。Williams（1842）の凡例だけが “á pronounced as in *calm*, *balm*, *farther* – e.g. 鍼 *kám*, 横 *wáng*.” のように，説明の後に漢字と字音が追記されている点で異なるに過ぎない。

母音字と連字のみを対象として，各書の凡例の文句に違いが見られる項を挙げると，表 1 のようになる。(1) から始まる番号は *Lexilogus* の凡例に記され

【表 1】各書の凡例で母音字と連字についての文句に見られる違い

	字母	Bridgman（1839）	*Lexilogus*（1841）	Bridgman（1841）	Williams（1842）
(1)	a/*ɐ	as in quota, America, agreeable.	as short *u* in tun, pun. This is a sound sui generis, and must be learned from a native.	quota, America, agreeable, and like short *u* in tun, pun.	同左
(4)	i/*ɪ	short as in pin, sin, sing.	同左	同左	short as pin, sin.
(10)	au/*ɐu	as in plough, our; or as *ow* in brow, but closer.	as *ou* in plough, our; or as *ow* in cow, brow, but closer.	同左	同左
(11)	éu/*e:ʊ	with both letters distinct and separate.	with both letters distinct, resembling the colloquial contraction say'em.	同左	同左
(13)	oi/*ɔi	as in goitre, oil; or *oy* in joy, alloy.	as in oil; or *oy* in joy, alloy.	同左	同左

た順番であり，“/”の左は各書の表記，右は筆者による推定音価である。

表からは *Lexilogus* の文句が Bridgman（1839）ではなく Bridgman（1841）の文句とより一致することが分る。上述のとおり *Lexilogus* の序文には，本書で粵語音を表すために用いられているラテン文字表記がブリッジマンの『名文選集』で採用された方式であると明記されているが，表 1 に見られる一致は，この『名文選集』が 1839 年の初版ではなく，41 年の版を指している可能性を示唆するものである。澳門で刊行された Bridgman（1841）は 1841 年 6 月 10 日の序文を冠する。しかし粵語音をラテン文字で書き取ったブラウンは，同年 4 月 1 日から 9 月 10 日まで，マラッカをはじめ東南アジアを歴訪するため，澳門を不在にしていた（Brown 1941：578）。ブラウンは澳門出航前に Bridgman（1841）の凡例の草稿を入手していたか，そうでなければ Bridgman（1839）に実用化が始まるこの表記法の考案に関与，精通していたと考えられる。

ところで，Bridgman（1839）に始まるこの表記法の考案に関与した可能性が有る人物として，米国マサチューセッツ州出身のブリッジマンの他に，ニューヨーク州出身のウィリアムズ（Samuel Wells Williams）が挙げられる[(8)]。*Lexilogus* で書き取りを行ったブラウンはというと，コネチカット州の出身であった。仮に特定地域の方言がこの表記法の下敷きになっていたとすれば，それは当時の米国北東部の方言ということになろう。しかし，本書および Bridgman（1839），Bridgman（1841），Williams（1842）の凡例には，限定された地域や階級に特有な発音を指示する表現は見当たらない。また『中華叢報』（第 6 巻：481）掲載の草案では，字母 o の説明で lot を語例に挙げ，且つ相対する長母音の説明で語例に lord を挙げている。これは字母 o の音価が非円唇母音 [ɑ] ではなく，円唇母音 [ɔ] であることを意味する。故にアメリカ英語が念頭に置かれていたとは言い難い。念頭に置かれていたのは彼らが共通認識として抱いていたところの標準英語であったと考えられる。

2.2　記号表現と記号内容

先ず母音字と連字について，記号表現と記号内容（即ち表記と推定音価）を以下に示す。(1) から始まる番号は *Lexilogus* の凡例に記された順番であり，“/” の左は本書の表記，右は筆者による推定音価である。各項とも凡例で挙げられた英語やフランス語の語彙を引用し，該当する字母には筆者が下線を付した。ただし，(10) áu，(11) éu，(15) úi については文句全体を引用した。また幾つかの字母については，聴覚印象としての長短や口唇の開閉が記されているので，【　】を付して引用した。

(1)	a/*ɐ	tun, pun.【short】
(2)	á/*ɑ:	calm, balm, father.
(3)	é/*e:	may, lay; neigh.
(4)	i/*ɪ	pin, sin, sing.【short】
	í/*i:	machine, marine, police.【long】
(5)	ó/*ɔ:	lord; awful; all, tall.
(6)	ò/*o:	no, so; snow, flow, glow.
(7)	u/*ʊ	bull, pull; foot, book.
	ú/*u:	rule; school, fool.
(8)	ü/*y:	l’une (the French sound).
(9)	ai/*ɐi	aisle; tie; life.【closer】
	ái/*ɑ:i	aye.
(10)	au/*ɐu	plough, our; cow, brow.【closer】
	áu/*ɑ:u	like the preceding, with the *a* long.
(11)	éu/*e:ʊ	with both letters distinct, resembling the colloquial contraction say’em.
(12)	íú/*i:u	pew.【more open or lengthened】

（13） oi/*ɔi oil; joy, alloy.

（14） ui/*ʊi fluid, ruined.【more open】

（15） úi/*u:i like the preceding, with *u* long.

母音字 é については，18 世紀の [e:] から 19 世紀の [ei] へと変化した英語語彙 lay，may，neigh が *Lexilogus* の凡例で挙げられているため，音価に *e: と *ei のいずれを推定するかが問題となる。小論では *e: を推定する。長母音を推定する理由は次のとおりである。

① [ei] が優勢を占めるのは 19 世紀中葉以降であること（Jones 2006：302-306）。

②『中華叢報』掲載の草案には「they のように長く」と記されていること（第 6 巻：481）[9]。

③『中華叢報』掲載の草案には，音価が *ei と推定される連字 ei が別に設けられていること（第 5 巻：26，第 6 巻：483）。

母音字 ò についても，18 世紀の [o:] から 19 世紀の [ou] へと変化した英語語彙 no，so，snow，flow，glow が *Lexilogus* の凡例で挙げられているため，音価に *o: と *ou のいずれを推定するかが問題となる。小論では *o: を推定しておく。長母音を推定する理由は次のとおりである。

① [ou] が優勢を占めるのは 19 世紀中葉以降であること（Jones 2006：306-309）。

②『中華叢報』掲載の草案には「sow のように長く」と記されていること（第 6 巻：481）[10]。

③『中華叢報』掲載の草案には，音価が *o:u と推定される連字 óu（第 5 巻：26）や òu（第 6 巻：483）が別に掲げられていること。

ただし，『中華叢報』（第 5 巻：26）では，*Lexilogus* の ò に相当する母音字 ó について「foot の oo が後続するようなこともある」と記され[11]，連字 óu については「引き延ばした o との区別は疑わしい」とも述べられている[12]。こ

れらは英語の o が二重母音化しつつあったことを示すものであろう。よって，*Lexilogus* の ò の音価に *ou ないし *oŭ を推定すべき余地が皆無なわけではない。

母音字 ü については，『中華叢報』に「l'une（フランス語）のように長く」と記されているので（第 6 巻：481）[13]，長母音 *y: を推定する。

連字 éu については，*Lexilogus* の凡例で「2 つの字母をともに明瞭に発音する」よう求められている。母音字 é の音価が *e:，u の音価が *ʊ と推定されるため，*e:ʊ のような二重母音であったと推定せざるをえない。後述するように，ブラウンは *Lexilogus* で é/*e: に対する短母音 *e を，凡例に挙げられていない字母である e を意図的に用いることで表そうとした。よって，もしこの二重母音の音価が *e:ʊ ではなく *eʊ であったとすれば，ブラウンは連字 éu ではなく，eu を用いたはずである。しかし，文例で éung が 178 例，éuk が 49 例現れるのに対して，eung は僅かに 10 例，euk は 5 例しか現れない。

連字 ui については，『中華叢報』に「短く」と記されているので（第 6 巻：483），*ʊi を推定する。

『中華叢報』掲載の草案では，短母音には補助記号を付さず，長母音にはアキュート・アクセントやグレーヴ・アクセントを付すことが規定されている（第 5 巻：24）[14]。*Lexilogus* の凡例に記された聴覚印象としての長短もこれに対応しており，まとめると次のようになる。

母音字

	長		短
(2)	á/*ɑ:	(1)	a/*ɐ
(3)	é/*e:		
(4)	í/*i:	(4)	i/*ɪ
(5)	ó/*ɔ:		
(6)	ò/*o:		
(7)	ú/*u:	(7)	u/*ʊ

（8）　ü/*y:

連字

長		短	
（9）	ái/*ɑ:i	（9）	ai/*ɐi
（10）	áu/*ɑ:u	（10）	au/*ɐu
（12）	íú/*i:u [15]		
（15）	úi/*u:i	（14）	ui/*ʊi

現代の粤語，少なくとも広府片に属する方言では，韻腹（主母音）に長短の別が存在する。*Lexilogus* の母音字と連字は，粤語の基層にタイ・カダイ語族の言語を想定する根拠の一つともなっている，粤語以外の漢語系諸語では極めて稀なこの特徴が，19 世紀前期においても存在していたことを示している。

続いて，子音字について記号表現と記号内容を示す。（16）から始まる番号は *Lexilogus* の凡例に記された順番である。各項とも凡例で挙げられた英語の語彙を引用し，該当する字母に下線を付した。ただし，（28）sz'と（31）tsz'については文句全体を引用した。

（16）　ch/*tʃ　　chair, cheap.

（17）　f/*f　　fine, fair, face.

（18）　h/*h　　he, home, house.

（19）　k/*k　　kith, key, king.

（20）　kw/*kw　　quite, quash.

（21）　l/*l　　lane, lay, low, long.

（22）　m/*m　　may, man, much.

（23）　n/*n　　nay, new, no.

（24）　ng/*ŋ　　singing; hanging.

（25）　p/*p　　pay, pomp, pound.

（26）　s/*s　　son, sea, say.

（27）　sh/*ʃ　　shall, she, show.

（28）　sz'/*sɿ　　pronounced with a strong emission of breath, as if followed by *i* half suppressed.

（29）　t/*t　　time, tune, tent.

（30）　ts/*ts　　wits, bits.

（31）　tsz'/*tsɿ　　pronounced like *sz'*, with only the addition of a *t*.

（32）　w/*w　　wind, woe, will.

（33）　y/*j　　young, your, youth.

凡例では（26）s と（30）ts の他に（28）sz'と（31）tsz'が立てられている。sz'について「ある程度圧し殺した i を伴い」発音することが求められているため，小論ではこの z'を声母の一部分とは見なさず，韻母を表すものと見なす。tsz'の z'についても同じである。z'の音価には摩擦を伴う非円唇舌尖母音 *ɿ を推定する[16]。後節で音節表において示すように，韻母 *ɿ は声母 *ts，ts^h，s とのみ結合する。つまり z'は子音字 ts，ts'，s とのみ結合する。そして tsz'や sz'は他の如何なる字母とも結合しない。

この他に，*Lexilogus* の凡例に記されていないにも拘わらず文例に現れる子音字が存在する。b，d，j，そして ch'，h'，k'，p'，t'，ts'である。これらはいずれも Bridgman（1839）等の凡例にも記されていない。b，d，j は *Lexilogus* の文例で他言語からの借用語にのみ現れる。音価にはそれぞれ *b，*g，*dʒ を推定する。ch'，k'，p'，t'，ts'については，' が送気性を表すと考え，それぞれ $*tʃ^h$，$*k^h$，$*p^h$，$*t^h$，$*ts^h$ を推定する。ただし h'については，h/*h の表記上の異体であり，音声特徴に配慮したことによる工夫と見なす。

2.3　凡例に記されない母音字と連字に関する問題

Lexilogus に記される 7862 音節分のラテン文字表記を調査すると，凡例に記されていないにも拘わらず文例に現れる母音字と連字の存在が浮び上がる。e,

è, ì, o や áí, áú 等がそれである。これらは Bridgman（1839），Bridgman（1841），Williams（1842）各書の凡例にも現れない（ただし e は Williams（1842）にのみ現れる）。*Lexilogus* の文例では，これらは凡例に記されている字母と混用される傾向が認められる。韻母 *ɪk を表す表記として，ik の他に ík と ìk が使用されているのはその一例である。筆者の分析では，これらの字母は単なる誤植に因るものと，記録者ブラウンが意図的に用いたものとに大別される。

本節では，これらの字母からブラウンが意図的に用いた（およびその可能性が有る）ものを抽出し，分析を加える。先に結論を述べると，ブラウンが意図的に用いたと考えられるものは，Bridgman（1839）以来の表記法では表すことのできない音声特徴を反映している。そのため，*Lexilogus* のラテン文字表記は，Bridgman（1839）以来の表記法と全てにおいて合致するものではなく，ブラウンによる独自の工夫が施されたことになる。この工夫は Bridgman（1839）等には見られない。故に *Lexilogus* に関して提出された目下唯一の知見「[Legge 1841] の表記は [Bridgman 1839] に據っている」は，特に母音字と連字に関して，正鵠を射ているとは言えないことになる。

2.3.1　e に関して

母音字 e は，*Lexilogus* の凡例に記されていないが，文例には現れる。『中華叢報』掲載の草案では，説明に英語語彙 yet，men や met が挙げられているため（第 5 巻：25，第 6 巻：480），音価に *e を推定する。これは é/*e: と長短の対を成し，上述の「短母音には補助記号を付さず，長母音にはアキュート・アクセントを付す」という規定を満たす。

表 2 は母音字 e，é を含む韻母の，*Lexilogus* の文例における出現数である。

【表2】母音字e，éを含む韻母の出現数

韻腹＼韻尾	_/*Ø	ng/*ŋ	k/*k
e/*e	e（2）	eng（1）	ek（26）
é/*e:	é（256）	éng（1）	ék（0）

表からは次のことが分る。

①母音字eの出現数は，閉鎖音韻尾の韻母で高く，ゼロ韻尾の韻母では低い。

②母音字éの出現数は，ゼロ韻尾の韻母で高く，閉鎖音韻尾の韻尾では0である。

つまり，eとéの出現は韻尾を条件としている。

ゼロ韻尾の韻母で僅かに2例現れているeは，che「者」とke「嘅」（各1例）であるが，これらは他の箇所ではそれぞれchéとkéで現れている。この2例はéの補助記号が欠落したことに因る誤植の可能性が高い[17]。

一方，閉鎖音韻尾の韻母で26例現れるekは，chek「隻」（24例）とshek「石」（2例）であるが，これらは他の箇所で韻母ékで現れていないため，誤植の可能性は否定される。「隻」と「石」の韻腹は現代の粵語広府片では概して長母音に属する。例えば，広州方言ではそれぞれ[tʃɛ:k]と[ʃɛ:k]で発音される。そのため，*Lexilogus*の基礎方言でも長母音であった可能性が高い。ブラウンが短母音を表すeを用いた理由としては，韻尾が閉鎖音であることにより，ゼロ韻尾の韻母に比べて相対的に韻腹の調音時間が短かったことが考えられる。ブラウンは敢えて長母音を表すéを避け，意図的に短母音を表すeで記述したのである。

この仮説は，鼻音韻尾の韻母としてengとéngが1例ずつ現れていることに対しても合理的説明が得られる点で都合がよい。鼻音韻尾の韻母における母音字eとéの比率は，閉鎖音韻尾の韻母（eのみが現れる）における比率とゼロ韻尾の韻母（専らéのみが現れる）における比率の中間に位置しているが，

この事実を韻腹の調音時間が閉鎖音韻尾の韻母（韻腹が相対的に短い）とゼロ韻尾の韻母（韻腹が相対的に長い）との中間に位置したことの反映と見なすことが可能になるからである。韻腹の調音時間が，鼻音韻尾の韻母でゼロ韻尾の韻母よりも遥かに短く，閉鎖音韻尾の韻母（中国語学で言う「入声韻」）で更に短くなることは，特に韻腹が長母音の音節で顕著な現象として，現代の粵語に対する音声実験で確認されている（Kao 1971：43-58）。

従って，小論では韻母に次の 3 形式を認める。

é/*e:　　éng, eng/*e:ŋ　　ek/*e(:)k

2.3.2　o に関して

母音字 o も，*Lexilogus* の凡例に記されていないが，文例には現れる。『中華叢報』掲載の草案では，英語語彙 lot が挙げられているため（第 6 巻：481），音価は ó/*ɔ: に相対する短母音 *ɔ となるはずである。しかし，筆者の分析では，*Lexilogus* の o は ó/*ɔ: に相対する短母音として用いられている類と，ò/*o: に相対する短母音として用いられている類とに分かれる。ブラウンは母音字 o を意図的に使い分けたと考えられるのである。

表 3 は母音字 o，ó，ò を含む韻母の，*Lexilogus* の文例における出現数である。

【表 3】母音字 o，ó，ò を含む韻母の出現数

韻尾 / 韻腹	_/*Ø	m/*m	n/*n	ng/*ŋ	p/*p	t/*t	k/*k
ó/*ɔ:	ó（116）	óm（1）	ón（2）	óng（63）	óp（0）	ót（0）	ók（1）
o/*ɔ, o	o（25）	om（0）	on（3）	ong（12）	op（8）	ot（0）	ok（91）
ò/*o:	ò（1168）	òm（128）	òn（17）	òng（7）	òp（0）	òt（0）	òk（6）

表からは次のことが分る。

①母音字 o の出現数は，閉鎖音韻尾の韻母で高く，ゼロ韻尾や鼻音韻尾の韻母では低い。

②母音字 ó の出現数は，軟口蓋鼻音 *ŋ 韻尾の韻母で高く，鼻音（*ŋ 以外）

韻尾や閉鎖音韻尾の韻母では低い。

③母音字 ò の出現数は，ゼロ韻尾と鼻音（*ŋ 以外）韻尾の韻母で高く，閉鎖音韻尾の韻母では低い。

つまり，o と ó，ò の出現はやはり韻尾を条件としている。

②と③は，基礎方言において韻腹が両唇鼻音 *m と歯茎鼻音 *n の前ではより狭母音，軟口蓋鼻音 *ŋ の前ではより広母音で現れる傾向が顕著であったことを窺わせるものである。そこで，先ず韻母に次の 5 形式を認める。

ó/*ɔ:	—	—	óng, ong/*ɔ:ŋ
ò/*o:	òm/*o:m	òn/*o:n	—

軟口蓋鼻音 *ŋ 韻尾の韻母として，óng の 63 例に対して ong が 12 例も現れているのは，韻母 eng の場合と同じく，韻腹の調音時間が，ゼロ韻尾の韻母ほどには長くならない傾向が存在したことを示すものであろう。

ゼロ韻尾の韻母で 25 例現れている o は，唇音声母の例が mo「冇」（1 例）のみと少ないことを除けば，声母の調音部位や中古音の声調による偏りは認められない。そしてこれらは他の箇所では韻母 ó か ò で現れている。補助記号が欠落したことに因る誤植の可能性が高い。

一方，韻母 op（8 例）と韻母 ok（91 例）は，韻母 ek の場合と同様に，*Lexilogus* の基礎方言でも長母音に属する韻母ではあったが，韻尾が閉鎖音であることにより，ゼロ韻尾の韻母に比べて調音時間が短かったことを記述するために使用されたと考えられる。ブラウンは敢えて長母音を表す ó や ò を避け，意図的に短母音を表す o を用いたのである。そして，韻母 op は韻母 òm/*o:m と，韻母 ok は韻母 óng/*ɔ:ŋ と，韻尾の調音部位がそれぞれ同じであるため，op の音価には *o(:)p，ok の音価には *ɔ(:)k を推定する。ここで母音字 o は，前者では ò/*o: に，後者では ó/*ɔ: に相対する短母音として使い分けられていることになる。

なお，韻母 òk が 6 例現れている。mòk「莫」（1 例），lòk「咯」（1 例），òk「屋」

（4 例）である。この中で òk「屋」については，ò/*o: に倣って音価を *o(:)k と推定することも不可能ではないが，次の理由により韻母 uk/*ʊk の変異と見なす。そして小論では韻母 *o(:)k を認めない[18]。

①「屋」の漢字音が他の多くの箇所では uk で現れていること（7 例）。

②音節 òk はゼロ声母であるため，韻腹 ʊ の入りわたりで口唇の狭窄を伴う［ŏʊk］のような音であった可能性があること[19]。

従って，小論では韻母に次の 7 形式を認める。

ó/*ɔ:	—	—	óng, ong/*ɔ:ŋ	—	ok/*ɔ(:)k
ò/*o:	òm/*o:m	òn/*o:n	—	op/*o(:)p	—

2.3.3　ì に関して

母音字 ì も，*Lexilogus* の凡例に記されていないが，文例には現れる。この字母は『中華叢報』掲載の草案にも記されていない。そのため，単なる誤植なのか，それともブラウンが意図的に使用したものなのか，判別は難しい。

表 4 は母音字 i，í，ì を含む韻母の，*Lexilogus* の文例における出現数である。

【表 4】母音字 ì，í，i を含む韻母の出現数

韻尾 / 韻腹	_/*Ø	ú/*u	m/*m	n/*n	ng/*ŋ	p/*p	t/*t	k/*k
í/*i:	í（875）	íú（220）	ím（85）	ín（217）	íng（17）	íp（2）	ít（45）	ík（8）
i/*ɪ	i（30）	iú（4）	im（7）	in（5）	ing（125）	ip（1）	it（12）	ik（194）
ì	ì（8）	ìú（0）	ìm（0）	ìn（1）	ìng（0）	ìp（0）	ìt（2）	ìk（11）

表からは ì の出現が韻尾を条件とせずに凡そ低いことが分る。そのため，e や o とは異なり，ì は音的環境に起因する何らかの特徴を表したものとは断定し難い。í か i の誤植である可能性が高いと思われる。11 例現れる ìk は，或いは韻腹から韻尾へ移る過程で [ɪ̈k] のように渡り音が生じており，それを記述しようとしたものかも知れないが，憶測の域を出ない（脚注 19 を参照）。

表 4 の í と i の出現数からは，基礎方言において韻腹が軟口蓋音 *ŋ，*k の

前では相対的に舌の位置が低く，且つ短母音で現れる傾向が顕著であったことが分る。これは現代の粵語広府片にも見られる現象である。なお，閉鎖音韻尾の韻母として，íp の 2 例に対して ip が 1 例，ít の 45 例に対して it が 12 例と稍高い比率で現れているのは，韻母 ek の場合と同じ理由によると考えられる。

従って，小論では韻母に次の 8 形式を認める。

í/*i:	íú/*i:u	ím/*i:m	ín/*i:n	—	íp, ip/*i(:)p	ít, it/*i(:)t	—
—	—	—	—	ing/*ɪŋ	—	—	ik/*ɪk

2.3.4　áí と áú に関して

連字 áí と áú は，*Lexilogus* の凡例に記されていないが，文例には現れる。これらの字母は『中華叢報』掲載の草案にも記されていない。表す音価は，凡例に記されている連字 ái/*ɑ:i と áu/*ɑ:u にそれぞれ同じである。

表 5 は連字 áí，áú，ái，áu の，*Lexilogus* の文例における出現数である。

【表 5】連字 áí，áú，ái，áu を含む韻母の出現数

韻尾（推定音価） 韻尾（表記）	*i	*u
i，u	ái（9）	áu（1）
í，ú	áí（95）	áú（24）

表からは áí と áú の出現数が ái と áu を遥かに凌駕しており，ái と áu は出現数が大変低いことが分る。ブラウンは áí と áú を基本形としたのであろう。韻尾に専ら í と ú を当てた理由としては，弛緩音 i/*ɪ と u/*ʊ で表すのを避けた可能性が考えられる。

なお，連字 úi についても ái や áu と同様の傾向が見られる。凡例に記される úi は文例での出現数が僅か 2 であるのに対し，凡例に記されていない úí の出現数は 14 である。

2.3.5　誤植について

明らかに誤植と判断されるものは，次のとおりである。誤植と判断される部分には下線を付した。

誤	該当する漢字	正
① ngà（1 例）	牙	ngá
② sé（1 例）	相	séung
③ chók（1 例）	速	ch'ok
④ t'u（1 例）	肚	t'ú
⑤ ch'u，yu（計 4 例）	處(3 例)，遇(1 例)	ch'ü，yü
⑥ páu，ts'íu，kíu（計 4 例）	扮，錢，見など	pán，ts'ín，kín
⑦ kú（1 例）	幾	kí
⑧ taï（1 例）	底	tai
⑨ hau（1 例）	係	hai
⑩ héung（1 例）	輕	héng
⑪ k'èuk（1 例）	腳	kéuk
⑫ síú（1 例）	須	sui
⑬ tsoì，hoì（計 2 例）	在，害	tsoi，hoi
⑭ tsio（1 例）	在	tsoi
⑮ hé（1 例）	嘅	ké
⑯ kò（1 例）	好	hò
⑰ t'an，sénng，knngなど(計 7 例)	頭痘油想様工共	t'au，séung，kungなど
⑱ yat（1 例）	有	yau
⑲ sz（計 2 例）	事	sz'

誤植の大多数は字母や補助記号の取り違えか欠落に因るものであることが分る。字母や補助記号の付加に因る誤植は⑩⑫⑬のみであり，少ない。例えば，

中古音の流摂字（唇音字以外）は，現代の広州方言で [ɐu] で現れるが，*Lexilogus* では一律に au/*ɐu で記され（267 例），これを韻母 áu や áú で記した（誤植）例は見当たらない。

3．粤語音の体系

Lexilogus に記される粤語音から帰納された声母と韻母は次のとおりである。“/” の前は本書の表音，後は筆者による推定音価である。必要に応じて【　】内に本書での語義か用法を，対応する中文の文例から引用して付した。

3.1　声母（零声母を含む）

p/*p 笆部遍白	p’/*p^h 排抱片	m/*m 馬買問木	f/*f 花悔放復
t/*t 檯膽店獨	t’/*t^h 肚【～飽】太添托	n/*n 耐拈寧【～願】	l/*l 來理鍊落
ts/*ts 做在隨雜	ts’/*ts^h 斜草靜七	s/*s 西事爽	
ch/*tʃ 茶主債値	ch’/*$tʃ^h$ 除恥出	sh/*ʃ 使心勝【～敗】石	y/*j 有因認玉
k/*k 家近幹覺	k’/*k^h 佢【他】企咳	ng/*ŋ 牙我硬	h, h’/*h 何喜勸學
kw/*kw 菓乖慣國			w/*w 話婚穩畫【～馬】
_/*Ø 雨疑換屋			

説明：①他言語からの借用語にのみ現れる b/*b，g/*g，j/*dʒ は除外する。

② *kw に相対する *k^hw が存在したと推測されるが，それを表す表音は現れない。

3.2　韻母（成節的子音 *m̩ と *ŋ̍ を含む）

á/*ɑ: 價花	ái, ái/*ɑ:i 大乖	áu, áú/*ɑ:u 炒交	ám/*ɑ:m 三減	án/*ɑ:n 山飯	áng/*ɑ:ŋ 橙冷	áp/*ɑ:p 雜押	át/*ɑ:t 八發	ák/*ɑ:k 或責
	ai/*ɐi 歸使	au/*ɐu 樓久	am/*ɐm 暗今	an/*ɐn 身問	ang/*ɐŋ 等生	ap/*ɐp 十入	at/*ɐt 筆核	ak/*ɐk 特黑
					íang/*i:ɐŋ 病□【未曾】			
é/*e: 遮己					éng, eng/*e:ŋ 贏定			ek/*e(:)k 隻石
í/*i: 二飛		íú, íu/*i:u 蕉曉	ím/*i:m 欠拈	ín/*i:n 聯見	ing/*ɪŋ 承整	íp, ip/*i(:)p 業碟	ít, it/*i(:)t 熱鐵	ik/*ɪk 食的
ó/*ɔ: 婆過	oi, oí/*ɔi 河代				óng, ong/*ɔ:ŋ 幫爽			ok/*ɔ(:)k 學國
ò/*o: 多老			òm/*o:m 今坎	òn/*o:n 乾看		op/*o(:)p 合		
ú/*u: 顧夫	úi, úí/*u:i 退會【能】			ún/*u:n 滿本			út/*u:t 闊	
	ui/*ʊi 娶誰			un/*ʊn 吞糞	ung/*ʊŋ 工仲		ut/*ʊt 出	uk, òk/*ʊk 捉讀
ü/*y: 除樹				ün/*y:n 段尊			üt/*y:t 脫月	
					éung/*e:ʊŋ 想窗			éuk/*e:ʊk 著【正】藥
z̍/*ɿ 自事			̍m/*m̩ 唔【不】		̍ng/*ŋ̍ 五			

説明：① *i:ɐŋ，*o:n に相対する *i:ɐk，*o:t がそれぞれ存在したと推測されるが，それを表す表音は現れない。

3.3　音節表

声母と韻母の結合関係は以下のとおりである。空欄は *Lexilogus* に該当する表記が現れないことを意味する。

必要と判断したものについては説明を加えた。【　】内には *Lexilogus* での語義や用法を注記した。語義については対応する中文の文例から相当する語句を引用した。用法の～は当該漢字を表す。同義でありながら相異なる複数の音節が確認されるものについては，又音（表記 / 推定音価）を記した。表中および又音の▲は，当該音節を表す表記が誤植を含んでいる可能性を表す。例えば，「快」には fái/*fɑ:i の他に fai/*fɐi が確認されるが，表記 fai は誤植を含む可能性が有る。

韻母＼声母	*ɑ:	*ɑ:i	*ɑ:u	*ɑ:m	*ɑ:n	*ɑ:ŋ	*ɑ:p	*ɑ:t	*ɑ:k
*p	把	拜	飽		辦			八ⓚ	白ⓞ
*p^{h}	怕	排	抛						
*m	馬	埋	貓		晩	猛			
*f	花	快ⓒ			煩			法	
*t	打ⓐ	帶		淡ⓔ	但	燈ⓖ▲	沓⑨	笪⑩①	
*t^{h}	打ⓑ	太ⓓ		探					
*n	那①			男	難				
*l	喇②	瀨③		藍	蘭	冷			
*ts				暫			雜		
*ts^{h}				劖⑦					
*s		晒④		三	散				
*tʃ	詐	債	找		賺	橙	執	甲⑪	責
*tʃ^{h}			炒						窄
*ʃ		唯⑤		衫ⓕ	山		十ⓘ		
*j							入ⓙ	日ⓜ	
*k	加	街	交	減	揀				隔
*k^{h}		解							
*ŋ	芽		咬		眼				
*h	下	鞋			閑	行⑧ⓗ			客
*Ø	鴉		拗⑥		晏		押		屋ⓟ▲
*kw	掛	怪			慣			骨ⓝ	
*w	華	壞			還				畫⑫

説明：①【彼】指示詞，②語気助詞，③【遺下】，④【知到～：盡知】結果補語，⑤【虚費】，⑥【～贏】，⑦【切】，⑧【走】，⑨【疊】，⑩【呢～地：此地】量詞，⑪【由～：蟑蜋】，⑫【～馬】。

又音：ⓐ t'á/*t^hɑ:, ⓑ tá/*tɑ:, ⓒ fai ▲, ⓓ t'ai ▲, ⓔ t'am ▲, ⓕ sham ▲, ⓖ tang/*tɐŋ, ⓗ hang/*hɐŋ, ⓘ shap/*ʃɐp, ⓙ yap/*jɐp, ⓚ pat ▲, ⓛ tat ▲, ⓜ yat/*jɐt, ⓝ kwat/*kwɐt, ⓞ pak ▲, ⓟ uk, òk/*ʊk。

声母 韻母	*ɐi	*ɐu	*ɐm	*ɐn	*ɐŋ	*ɐp	*ɐt	*ɐk
*p	弊			品			筆	白ⓖ▲
*p^h	剋①			貧				
*m	米	畝		聞	猛⑥		物	
*f	費	埠		䎃④			罰	
*t	弟	荳		單ⓒ▲	凳		笪⑨ⓔ▲	得
*t^h	體	投	淡ⓐ▲					
*n	泥	扭			能			
*l	禮	流	臨	囔⑤				
*ts	仔②	酒			爭⑦			
*ts^h	齊		尋	親	曾⑧		七	
*s	洗	修	心ⓑ	辛				
*tʃ	制	周	針	陣			枳⑩	
*$tʃ^h$		醜						
*ʃ	使	手	審	神	生	濕	實	
*j		優	飲	人		入ⓓ	一	□⑫
*k	雞	九	今	緊	羹		吉	
*k^h		球					咳	
*ŋ		牛		銀	硬			
*h	係	後		恨	肯			黑
*Ø	哎③		暗					
*kw	歸			軍			骨ⓕ	
*w	位			婚			核⑪	或ⓗ

説明：①【剋】，②【～女：子女】，③感嘆詞，④【睡】，⑤【佛～仁：羊毛布】，⑥【拔】，⑦【少】，⑧【未～：未】，⑨【呢～地：此地】量詞，⑩【罈～：塞子】，⑪【種】，⑫【食】。

又音：ⓐ t'ám/*t^hɑ:m, ⓑ sham/*ʃɐm, ⓒ tán/*tɑ:n, ⓓ yáp/*jɑ:p, ⓔ tát/*tɑ:t, ⓕ kwát/*kwɑ:t, ⓖ pák/*pɑ:k, ⓗ wák/*wɑ:k。

声母 韻母	*iːɐŋ	*eː	*eːŋ	*e(ː)k
*p *p^h *m *f	病ⓐ □①	 歪		
*t *t^h *n *l		 哩②	定ⓒ	
*ts *ts^h *s		謝 斜 寫		
*tʃ *$tʃ^h$ *ʃ *j		者 蛇 夜	 贏	隻 石
*k *k^h *ŋ *h		騎 起ⓑ	 輕③	
*ø				
*kw *w				

説明：①【未曾】，②語気助詞，③ héung と表記されているが héng の誤植と見なす。

又音：ⓐ ping/*pɪŋ，ⓑ hí/*hiː，ⓒ ting/*tɪŋ，t'ing/*t^hɪŋ。

声母 韻母	*i:	*i:u	*i:m	*i:n	*ɪŋ	*i(:)p	*i(:)t	*ɪk
*p	被	表		變	病㋒		別	
*p^{h}				篇	平			
*m	未㋐	廟		面	名			
*f	飛							
*t	地	弔	點		頂	碟	跌	的
*t^{h}		條㋑	添	填	停		鐵	
*n	你	鳥	念	年	寧②			
*l	利	了	廉	棟	零		纈④	力
*ts		噍①	漸		淨			卽
*ts^{h}				錢	靜			
*s		笑		先	性			息
*tʃ	指	兆			整		折	織
*tʃ^{h}	恥							
*ʃ	是	燒	閃	善	承		蝕	色
*j					英			抑
*k	奇	叫		件	經			
*k^{h}					□③			
*ŋ								
*h	棄	曉	欠	牽	兄			
*ø	耳	要	鹽	煙		業	熱㋓	
*kw								
*w								

説明：①【嚼】，②【～願】，③【沉底】，④【結子】。

又音：㋐ mé/*me:，㋑ tíú/*ti:u，㋒ píang/*pi:ɐŋ，㋓ yít/*ji:t（ít/*i:t の表記上の異体と見なす）。

声母 / 韻母	*ɔ:	*ɔi	*ɔ:ŋ	*ɔ(:)k
*p	婆㋐		幫	僕
*p^{h}	頗			
*m	摸		忘	莫㋚
*f	火		房	
*t	朶㋑	代	堂	獨㋛
*t^{h}			糖	托
*n		奈		
*l	蘿	來		落
*ts	左	再		昨
*ts^{h}	錯㋒	材	藏②	
*s	鎖㋓		爽	
*tʃ	助		牀	
*tʃ^{h}	初㋔		艙	速④
*ʃ	梳			
*j				
*k	個㋕	蓋	岡	覺
*k^{h}				
*ŋ	我㋖		昂	
*h	何㋗	河㋘	行③	學
*Ø	啊①㋙	愛		
*kw	菓		光	國
*w	禾		黄	

説明：①語気助詞，②【～銀】，③【倒～】，④ chók と表記されているが ch'ok の誤植と見なす。

又音：㋐ pò/*po:，㋑ tò/*to:，㋒ ts'ò/*ts^{h}o:，㋓ shó/*ʃɔ:，㋔ ch'ò/*tʃ^{h}o:，㋕ kò/*ko:，㋖ ngò/*ŋo:，㋗ hò/*ho:，㋙ ò/*o:，㋘ hó/*hɔ:，㋚ mòk ▲，㋛ tuk/*tʊk。

韻母＼声母	*o:	*o:m	*o:n	*o(:)p
*p	保		搬㋔	
*p^{h}	抱			
*m	務			
*f				
*t	多㋐			
*t^{h}	肚①㋑			
*n	惱			
*l	路			
*ts	早			
*ts^{h}	糟			
*s				
*tʃ				
*tʃ^{h}	初㋒			
*ʃ	數			
*j				
*k	高	今	趕	
*k^{h}				
*ŋ	餓		岸③	
*h	可	堪	看	合
*ø	阿②			
*kw	過㋓			
*w				

説明：①【～飽】，②【唎～】地名 Riau を表す借用語，③ ngón と表記されているが ngòn の誤植と見なす。

又音：㋐ tó/*tɔ:，㋑ t'u/*t^{h}u:（t'ú の誤植と見なす），㋒ ch'ó/*tʃ^{h}ɔ:，㋓ kwó/*kwɔ:，㋔ pún/*pu:n。

声母 韻母	*u:	*u:i	*u:n	*u:t
*p *p^{h} *m *f	布 普 嘸① 扶	背 每 悔	本 門 寬	 闊
*t *t^{h} *n *l	 肚②㋐ □③	對㋑ 退		
*ts *ts^{h} *s		醉㋒▲		
*tʃ *tʃ^{h} *ʃ *j	 由④			
*k *k^{h} *ŋ *h	古		管	
*Ø	污	會⑤	換	
*kw *w				

説明：①【～唣人】Bugis を表す借用語，②【～餓】，t'u と表記されているが t'ú の誤植と見なす，③【彼】指示詞，④【嗎嚟～】Malay を表す借用語，⑤【能】。

又音：㋐ t'ò/*t^{h}o:，㋑ tui/*tʊi，㋒ tsui/*tsʊi。

韻母＼声母	*ʊi	*ʊn	*ʊŋ	*ʊt	*ʊk
*p					
*p^{h}			篷		
*m			夢		目
*f		分①㋑	蜂		復
*t	對㋐	盾	動		讀
*t^{h}			同		
*n			濃②		
*l		鄰	弄	律	
*ts	罪	盡	眾		
*ts^{h}			總		
*s	歲	信			
*tʃ		准	鐘		捉
*tʃ^{h}				出	
*ʃ	水				縮
*j	餌		用		玉
*k			工		
*k^{h}			窮㋒		
*ŋ					
*h			熊		
*ø					屋㋓
*kw					
*w					

注記：①【十～】，②【被火燒】。

又音：㋐ túí/*tu:i，㋑ fan/*fɐn，㋒ kung/*kʊŋ，㋓ ák ▲。

韻母＼声母	*y:	*y:n	*y:t	*e:ʊŋ	*e:ʊk	*ɵ	*m̩	*ŋ̩
*p *p^{h} *m *f								
*t *t^{h} *n *l	女 涙	段	脫	兩				
*ts *ts^{h} *s		尊㋑ 算	絕	將 箱		子 似㋓ 事		
*tʃ *tʃ^{h} *ʃ *j	煮 除 鼠	轉 船	說	張 場 雙 樣	著② 約			
*k *k^{h} *ŋ *h	句 佢①㋐ 去	倦 勸	血	向	腳㋒			
*ø	寓	軟	月				唔③	五
*kw *w								

注記：①【他】人称代名詞，②【穿】，③【不】。

又音：㋐ kü/*ky:，㋑ chün/*tʃy:n，㋒ k'èuk ▲（kéuk の誤植と見なす），㋓ tsz'/*tsɵ。

4．結語

緒言で述べたとおり，*Lexilogus* の序文には，粵語音がある華人の発音をブラウンが書き取ったものであることが記されている。実際の言語音を書き取った資料であることは，本書の漢字音が『分韻撮要』に代表される粵語の韻書からの干渉を免れていることを約束すると同時に，特定の話者に起きていた言語現象の動態を如実に反映していることを意味するものである。これは 19 世紀前期の粵語の方言を解明する上での本書の価値を更に高めるものと言える。小論で行った分析からは，本書の基礎方言に次のような音声特徴が存在したことが判明した。この中で①②④は現代の広州方言にも認められる特徴である。

①韻腹に長短の別が存在した。

②韻腹（長母音）の調音時間は，鼻音韻尾の韻母ではゼロ韻尾の韻母よりも短く，閉鎖音韻尾の韻母では更に短かった。

③円唇後舌中段母音は，両唇鼻音 *m と歯茎鼻音 *n の前ではより狭母音，軟口蓋鼻音 *ŋ の前ではより広母音で現れた。

④非円唇前舌狭母音は，軟口蓋音 *ŋ, *k の前では相対的に舌の位置が低く，且つ短母音で現れた。

これらの特徴は，記録者ブラウンが試みた表記法の工夫を分析することで判明したものである。Bridgman（1839）提示の粵語音の体系から外れる言語音の微細を聴き分け，それを記述したことこそが彼の功績だと言ってよかろう。その高く評価されるべき聴力と判断力は，後に日本語を学んだときにも発揮されたものと推測される。

参考文献

荒木一雄 , 宇賀治正朋 . 1984.『英語学大系 10-1 英語史 III A』. 東京 : 大修館書店 .

高田時雄 . 2000.「近代粵語の母音推移と表記」『東方學報』（京都）, *72*, 740-754.

中尾俊夫 . 1985.『英語学大系 11 音韻史』. 東京 : 大修館書店 .

ブラウン（著）. 高谷道男（編訳）. 1965.『S.R. ブラウン書簡集：幕末明治初期宣教記録』. 東京 : 日本基督教団出版局 .

吉川雅之 . 2010.「Ｊ・レッグ編 *Lexilogus* に記される粵語音」『日本中国語学会第 60 回全国大会予稿集』, 92-96.

若田部博哉 . 1985.『英語学大系 10-2 英語史 III B』. 東京 : 大修館書店 .

Anonymous. [1851]. *General index of subjects contained in the twenty volumes of the Chinese Repository: With an arranged list of the articles.* [Canton]: [s.n.].

Bauer, Robert S., & Benedict, Paul K. 1997. *Modern Cantonese phonology*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Bridgman, Elijah Coleman. 1839. *A Chinese chrestomathy in the Canton dialect*. [Canton]: Society for the Diffusion of Useful Knowledge in China.

Bridgman, Elijah Coleman. 1841. *A Chinese chrestomathy in the Canton dialect*. Macao: S. Wells Williams.

Brown, Samuel Robbins. 1841. The third annual report of the Morrison Education Society: Read September 29th, 1841. *The Chinese Repository*, *10*, 564-587.

Harrison, Brian. 1979. *Waiting for China: The Anglo-Chinese College at Malacca, 1818-1843, and early nineteenth-century missions*. Hong Kong: Hong Kong University Press.

Jones, Charles. 2006. *English pronunciation in the eighteenth and nineteenth centuries*. Basingstoke & New York: Palgrave Macmillan.

Kao, Diana L. 1971. *Structure of the syllable in Cantonese*. The Hague & Paris: Mouton.

Legge, Helen Edith. 1905. *James Legge: Missionary and scholar*. London: Religious Tract Society.

Morrison, John Robert. 1836. System of orthography for Chinese words: That of Morrison's dictionary imperfect; unsuitableness of English, and suitableness of Italian vowels, for an accurate orthographical system; application of the Roman alphabet, as used in Italy, with some modifications, to the Chinese language. *The Chinese Repository*, *5*, 22-30.

Morrison, John Robert. 1838. On a system of orthography for the Chinese language: Introductory remarks; vowels; diacritical marks; diphthongs; consonants; marks to denote the tones. *The Chinese Repository*, *6*, 479-486.

Pullum, Geoffrey K., & Ladusaw, William A. 1996. *Phonetic symbol guide* (2nd ed.).

Chicago: University of Chicago Press.

Williams, Frederick Wells. 1889. *The life and letters of Samuel Wells Williams, LL.D., missionary, diplomatist, Sinologue*. New York & London: G.. P. Putnam's Sons.

Williams, Samuel Wells. 1839. Remarks on the system of Chinese orthography proposed in the Repository, vol.6, page 479. *The Chinese Repository*, *7*, 490-497.

Williams, Samuel Wells. 1842. *Easy lessons in Chinese: Or progressive exercises to facilitate the study of that language*. Macao: Printed at the Office of the Chinese Repository.

Wylie, Alexander. 1867. *Memorials of Protestant missionaries to the Chinese: Giving a list of their publications, and obituary notices of the deceased*. Shanghae: American Presbyterian Mission Press.

Yoshikawa, Masayuki. 2010. Differences between the Cantonese spoken in Canton City and a Canton suburb in the late 1830s. Paper presented at IACL-18 & NACCL-22 Joint Conference, Harvard, MA.

吉川雅之 . 2009.「兩份早於馬禮遜的粵語資料」錢志安（編）『粵語跨學科研究：第十三届國際粵方言研討会論文集』(pp. 287-304). 香港 : 香港城市大學 .

1　*Chinese Repository* は日本では従来『支那叢報』や『中国叢報』の名で呼ばれてきた。しかし，本誌には日本や朝鮮，東南アジア，南アジアに関する記事も多く掲載されているので，小論では『中華叢報』という和名を与えることにする。

2　“[A]ccording to the orthography adopted in Mr. Bridgman's Chrestomathy.” なお小論では *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect* に『名文選集』という和名を与えることにする。

3　「粵語」とは地域方言や階級方言など各種変異まで包含した総体としての「広東語」を指す学術名称である。粵語は漢語系諸語に属する一大グループであるが,「普通話」や「国語」の母体となった「官話」とは系統を異にする。日本では従来「広東語」という呼称が広州・澳門（マカオ）・香港を頂点とした三角形，即ち珠江デルタを覆う粵語方言群を意味するものとして使われてきた。

4　小論では粵語の音節について中国語学の用語を用いる。粵語の音節構造は「声母（initial）＋韻母（rime）／声調（tone）」で表される。声母とは頭子音を指す概念であり，音韻論で言う開始部（onset）に相当する。韻母は頭子音に後続する部分を指し，脚韻部に相当する。声調は音節全体にかかる音の高低変化である。韻母は韻腹と韻尾（final）に細分される。韻腹はいわゆる主母音であり，中核（nucleus）に相当す

る。韻尾は末音であり，末尾（coda）に相当する。音声としての声母や韻尾の無い音節については，音韻解釈でこれらにゼロ（Ø）という値を設定する場合があり，ゼロ声母やゼロ韻尾と呼ぶ。なお研究者によっては，主母音の直前に渡り母音（medial）として韻頭という部分を立てることがあり，「韻母＝（韻頭＋）韻腹＋韻尾」となる。

5　粵語音の提供者についてはすでに Yoshikawa 2010，吉川 2010 で仮説を提示した。

6　“There may be a difference in the initial sounds of some of the words, as the Chinaman referred to is not from Canton city, but from a village, about fifty *le* in the interior.”

7　小論で粵語を漢字表記する場合，全ての字形は筆者が当てたものである。漢字表記に際しては *Lexilogus* の中文の文例に記される字形を参考にしたが，粵語に特有な語については，原則として 19 世紀の西洋人の手に成る粵語資料に現れる字形に従った。ただし，本字が不明で且つ固定した漢字表記を持たないものについては□で記した。

8　高田（2000）はこの方式がウィリアムズの考案であることを自明のものとして論を進めている。確かにウィリアムズは Bridgman（1841）の執筆と刊行に大きな貢献をしている（Williams 1889：105）。だが，この方式がウィリアムズの，特に彼による単独の考案であったことを示す確証を，筆者は未だ掴んでいない。

9　“[L]ong as in they.”

10　“[L]ong as in sow.”

11　“[P]ronounced as in note, sometimes a little more protracted as in roll, cold, or even as if followed by the *oo* in foot.”

12　“[A] very lengthened sound of the *o* in roll, which seems to be followed by the sound of short *u* in put; the distinction between this and the sound of a protracted *o* is considered doubtful.”

13　“[L]ong as in l'une (French).”

14　“[A] short vowel is left without any mark over it, … The same letter has sometimes to be used for two different long sounds, in which case we use the acute accent over one, and the grave accent over the other;”

15　íú の ú は韻腹（主母音）ではなく韻尾を表す。韻尾には母音の長短の別は存在しない。

16　この Long-Leg Turned Iota は専ら中国の研究者によって使用されている記号である。詳細は Pullum & Ladusaw（1996：89）を参照。

17　この他に è が 1 例（yè「嘢」）現れるが，これも é の誤植である可能性が高い。

18　この他に ók が 1 例（chók「速」）現れるが，これは ch'ok の誤植と思われる。

19　現代の粵語については，Bauer（1997）のように，韻腹が狭母音で韻尾が軟口蓋音である 4 つの韻母 /iŋ/，/ik/，/uŋ/，/uk/ について韻腹の後に渡り音を認め，精密表記による音価をそれぞれ [e^{j}ŋ]，[e^{j}k]，[o^{w}ŋ]，[o^{w}k] とする研究が有る。

The Romanized Transcription and Phonological Representation of Cantonese in James Legge's *Lexilogus*.

YOSHIKAWA Masayuki

A Lexilogus of the English, Malay, and Chinese Languages: Comprehending the Vernacular Idioms of the Last in the Hok-keen and Canton Dialects was compiled by James Legge (1815–1897) of the London Missionary Society in Malacca, who later became one of the most famous Sinologists of the nineteenth century. This work, a collection of model sentences in English, Malay, written Chinese, Southern Min, and Cantonese, was printed at the Anglo-Chinese College Press in 1841. The existing literature has paid scant attention to this historical text, even though *Lexilogus* provides an accurate picture of the Cantonese spoken in a Canton suburb up to the late 1830s. In this paper, we examine the Romanized transcription for Cantonese pronunciation in *Lexilogus* and analyze the phonological system from a synchronic perspective with respect to the initials and rimes. The investigations carried out by linguists in the last decade have extended our knowledge of Cantonese in the pre-World War II period and our analysis will further elucidate this subject.

This paper demonstrates that the Romanized transcription used in *Lexilogus* does not exactly correspond to the orthography used in Bridgman's *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*. The Romanized transcription used in *Lexilogus* was partly arranged by Samuel Brown, who formulated the Cantonese pronunciation system. His devices capture the phonetic features of Cantonese, which the orthography used by Bridgman could not represented. For example, we discover that the vowels *e* and *o* were deliberately used to represent the mid vowels of the short duration that preceded the stop final consonants -p, -t and -k in *Lexilogus*. Further, our analysis shows that *ò* was indeed used to represent a

raised mid back rounded vowel that preceded the bilabial or alveolar final consonants.